

第2節 新しいライフスタイルを求めて

手軽志向とグルメブーム 西口や中華街へお食事に

増える外食や調理食品の利用

NHKの調査によると、55年から60年の間に、日曜には外食するという人が目立って増えている。小学生から父親、母親といった年代の人まで例外なく増えており、家族連れで食事に出かける人が多くなっていることをうかがわせる。

外食の増加は市民の家計にもあらわれていて、食費に占める外食の割合は、年々増加している。ファーストフードの店やファミリールレストランがたくさんできて、気軽に利用できるということも、こうした傾向に一役買っているのかもしれない。とはいえ、このような店を利用するのは若い世代が圧倒的で、特に学生の多さが目立つ。

一方、持ち帰り弁当の利用は若い世代とともに高齢者の利用も多い。ライフステージ別では、独身者の利用が圧倒的である。最近では、一人で食べるという意味の「個食」や「狐食」という言葉も聞かれるようになった。

また、調理食品(弁当、惣菜、冷凍食品など)

も確実に家庭の中での位置を大きくしている。外食や調理食品の利用は、家事サービスの外部化、言ってみれば、手軽に、ということだろう。こうした傾向の背景には、女性の社会進出や単身者の増加などが考えられ、今後も多くなることが予測される。

グルメブーム

手軽志向の一方で、豊かな社会を反映して本格志向も目立っている。ある時は手軽に、また



約130軒の中華料理店が味を競う、中華街



市民データ

おもしろ

- 食事は規則正しくとっている人は **72%**
全体で
- 東京通勤者は、遠距離通勤のためか **58%**
独身者はついついルーズになってしまって **50%**
- 洋食より和食のほうが **73%**
好きな人
- 市営地下鉄線沿線の方は、和食好み **84%**
京浜東北線沿線は、和食派が少なく **63%**
- わが家では月に1回は新しい料理に **40%**
挑戦してみる
- わが家には伝統料理がある **40%**

あるときはリッチにと使い分ける時代のようだ。TVには豪華料理の番組が登場し、おいしい店のガイドや究極のメニューを追求するマンガが話題になったり、食に対するこだわり「本格志向は「グルメ」という言葉とともにますます盛んだ。

数字にもそれは、はっきりあらわれている。

Life Style

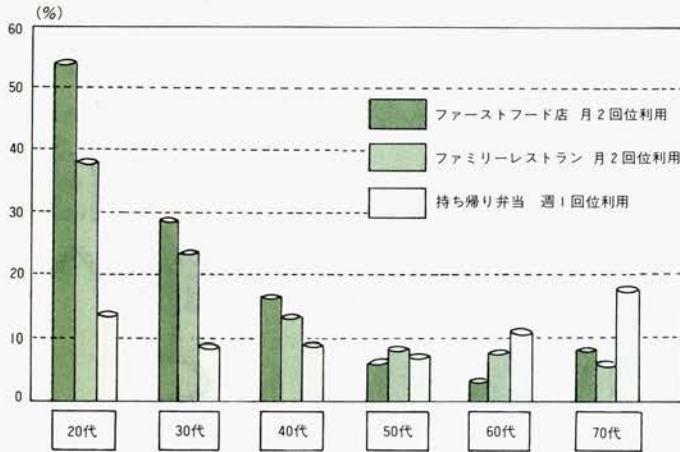
■外食が増えている（食費に占める外食の割合）



※50年の数値は学校給食費を含む

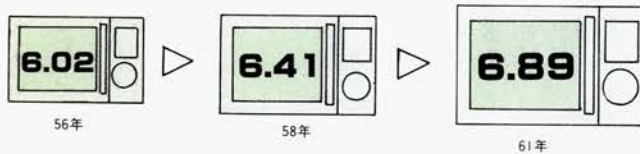
総務庁「家計調査年報」

■若者と高齢者に多い外食利用



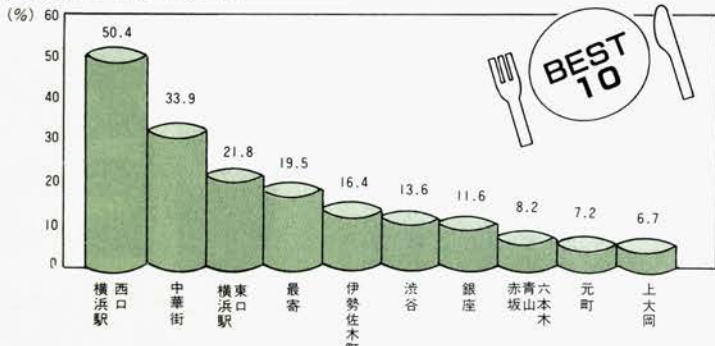
横浜市「市民の日常生活に関する調査」(昭和62年度)

■調理食品の利用が増えている（食費に占める調理食品の割合）



総務庁「家計調査年報」

■飲食に行く街ベスト10



横浜市「市民の日常生活に関する調査」(昭和62年度)

「自分は味にはうるさいほうだ」と思っている人が市民の54%、「おいしいと評判の店によくかけてみる」が36%。味だけでなく器も大事で、「料理を盛る器にはうるさいほうだ」が32%。もちろん家庭での料理もおろそかにせず、「わが家では料理に良い材料を使う」68%と、食卓の充実がうかがえる。そして味や器にうるさい自称グルメは男性より女性に多く、年齢的には50代前半で、年収が高いほど多い。

飲食に行く街は横浜駅西口と中華街。おいしいものを食べに行こう、と話がまとまると、みんなどこへ食べにいくのだろうか。近所ですます、という人もいるが、横浜駅西口へ、という人が最も多い。買いたいものの前後に飲食をするから、ということも言えそうだ。2位は中華街。3人に1人の支持をうけており、市民のグルメスポットの一つともなっているようだ。

6〜8位には渋谷、銀座、赤坂周辺と、都内の街が並んでいる。これらの街を利用するのは、直通で行き来できる東横線や田園都市線沿線の住民や、東京通勤者が多い。世代別に見ると、30〜40代は近所ですますことが多い。また、鎌倉が40代に人気、20代は横浜駅東口や渋谷、元町、赤坂周辺とおしゃれな街好み。ステキな雰囲気も、家では味わえないおいしさの一つなのだろう。